



発表の順番決めレースを楽しむ3年生
リレー形式で応援も盛り上がっていた



ゲームの実況と進行を行った生徒
豊かな表現力で会を盛り上げた
才能を発揮する場を与えることは重要

りの演技であった。以下に私の拙い評価を示しておく。三年一組A：ユーモア、三年四組：獨創性、三年三組：氣迫とアイデア、三年一組B：チームワークと成就感、三年二組：和、出し切った感。それぞれに良さを活かそうとした結果であつたらう。順位を決めるのが本当に辛くなるくらい、それぞれに素晴らしい演技内容であつた。その後はエンディングムービー上映、優勝チームの発表、表彰（優勝チームの他、体育委員や実行委員には感謝状も！）を行い、校長先生に講評をいただいて終了となつた。本当に細部の細部まで、生徒の手作りの行事であ

つた。
生徒の可能性を活かす指導とは
授業を参観して考えたことがある。まずは、生徒が主体となる授業づくりについてである。今回の授業では、実に多くの生徒の「キラキラ」を見ることができた。実行委員として運営に携わつた生徒、ゲームの実況を上手に行つた生徒、ムービーを作成した生徒、リーダーとしてグループを指導した生徒、そして目立たずともフォロワーとしてグループを支えた生徒。（特に演技中は、リーダーの指導に応えようと懸命に頑張るフォロワーの真剣な表情が目を引いた。）授業を計

画された体育科の先生方は、「この生徒たちはこれだけの力を持つていてるんですよ、ということを見てもらいたい」という想いで、生徒の力を見出し、その力を発現する機会を何度となく与え、ここまで引っぱり上げてきたのだと思う。もしこの授業が、この場限りの「生徒主体」であつたとしたら、生徒は持ち前の付力を発揮し、教員側が喜びそうな発表を金太郎飴のように量産したであらう。時間をかけて、「この体育の授業はお前たちが作るんだぞ」と先生方が投げかけ続けたからこそ、生徒は十分な安心感を持って自分たちなりの良さを発揮したので。「一部ストップをかけようとした内容もあつた」らしいが、それでもトライさせた先生方の姿勢を見習いたい。
「優勝チーム」は必要だったのか
次に考えたのが、差をつけることの意味である。自分自身、勉強でもスポーツでも、常に集団の中でどれだけ上に近づくかを競ってきた世代であるため、「答えが複数ある」とか、「評価軸が一つでない」とかいつたものを目の前にすると、どうもモヤモヤする。この発表会でも、全てのグループにストーリーを想像してしまつて、ついつい「全員優勝！」と言つてしまいたくなる。もちろん、そ

ここにあって順位を付けることの意義は理解している。それこそ社会勉強の一つである。そうとさえつても、「今回優勝チームを発表することにどんな意味があったのか。自由に計画・発表させたうえで、本当にそうすべきだったのか。」としばらく悩んでいた。おそらく生徒の中にも同じような考えを持つている者もいるだろう。答えを保留にしたまま過ごす中で、ある起業家の言葉がヒントを与えてくれた。問いに対する答えではないが、いつか生徒に理解してほしい言葉だった。「努力が成果に表れるのは、人の縁に因る」ということだ。小学生の徒競走をイメージしてほしい。彼らの頭の中で「足が速い」とは、「六人の中で何番目だったか」というものすごく単純な相対評価の中での話だ。速い五人に囲まれれば自分は遅い。遅い五人に巡り合えば自分は速い。どんなに努力を重ねたとしても、相対的に自らを評価していると、自己肯定感が高くもなるし低くもなる、ということだ。このことを気付かされ、生徒に伝えておくべき言葉を思いついた。「努力の成果は人との縁次第だ。他人軸も理解し、かつ自分軸で自分の成長を評価できる人間は強い。」である。精神年齢の高まっている高校生には伝わってほしい。



投票するチームを話し合う1年生は、この後集団行動のテストを控えている。やる気アップにつながった。

きつと、仲間を大事にすること、また自分を大事にすることにつながるはずだ。
一年生が参加したことの意味
 このイベントに一年生を参加させたことの影響は大きかったと考える。発表の最中は一年生の中から歓声が終始上がっていた。終わってから数名の生徒に感想を聞くと、「次は自分たちかというプレッシャーを感じた」「自分も行進でクロスするのをやってみたい」「発表内容を自分たちで考えることに挑戦してみたい」等々、頼もしい声を聞いた。自らの先輩が集団行動にこれだけの想いを込めてやっているのだという事実が、



3年生の体制づくりの協力。練習ローチのフィードバック。最もいい前ダミー発表。

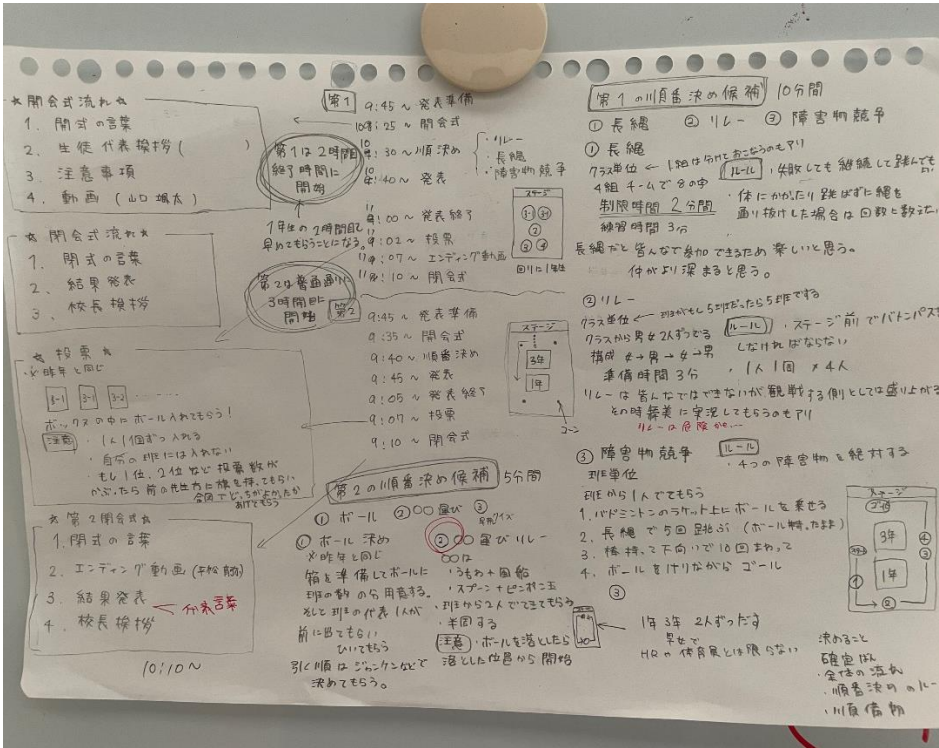
熱意として間違いなく一年生に伝播したと感じる。きつと体育祭のブロック練習に良い影響をもたらしてくれるだろう。また少し飛躍するかもしれないが、教員側としては、高校における縦割り活動のヒントにもなったのではないかとも思う。縦割りの模索を始めている学校では、学年の異なる生徒の両方にかかにして学びを保障するかが壁になっていくようである。ただ、このように学年を越えて共通した課題設定を行っている現状があれば、大きな困難もなく取り組める可能性が大いにいると感じた。

「自立・自発」育成に向けて

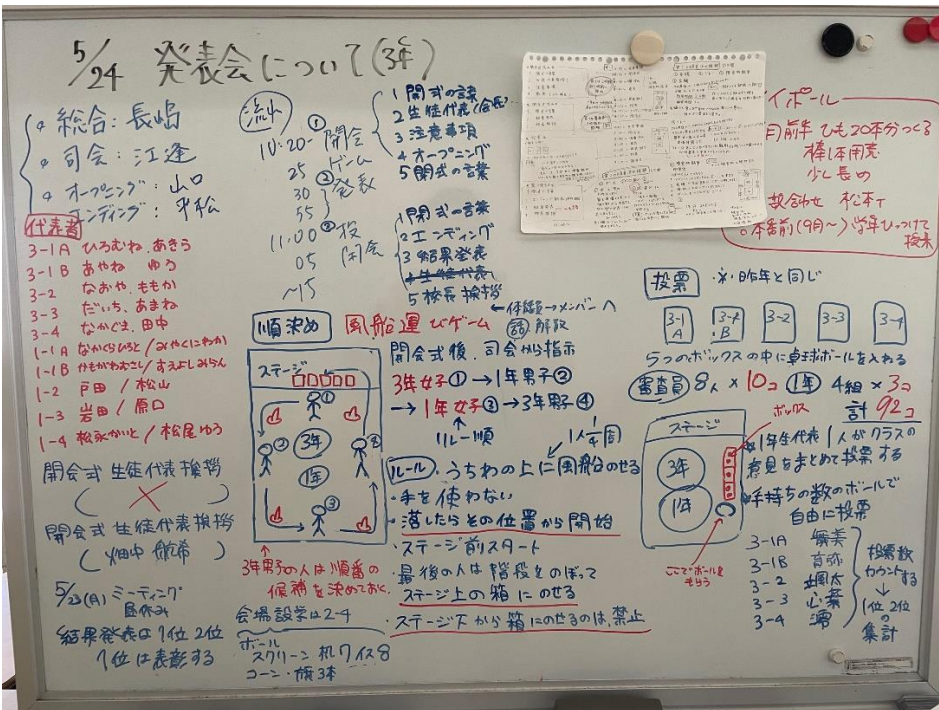
最後に、今回の発表会に至るまでの二年間の新里先生のご指導について考えてみた。おそらく一年生の頃から段階的に「教えること」や「考えさせること」や「任せること」のバランスを調整しな

がら、指導してこられたのだろう。生徒とのやり取り、生徒の話を聞く姿勢、グループ内の生徒同士の関係性、こんなありふれたものの中に先生の指導スタイルが見えたと思う。「ここに付けて」自分は三十文字ぐらいいしか喋っていませ

んもんね。」と語っていたが（もちろん誇張もあるだろうが）、その姿勢こそが生徒の猶興精神を育んでいるのではないのか。この七十五回生は一体どんな体育祭を作るのだろうか、楽しみになってきた。



生徒が体育科の先生に持参した企画書案
B5のルーブリープにアイデアがびっしりと詰め込まれている



企画書を元に体育科の先生も参加した企画会議の議事録
ホワイトボードに議事内容をコンパクトにまとめている
議論も活発だったようで、会議のあり方として参考になりたい